



## 私の音へ

## 甲南高校一年 新地 夏樹

ドユー。深く、深く、海の底までも響きそうな重低音が体中を駆け巡る。二音目からは勢いのあるスケール。オクターブの「ド」に達すると、徐々にスピードを落として静かなマイナーの三拍子のフレーズが続く。

シヨパンのバラード一番。中学三年生の冬、初めて聴いたときは、まるで一編の物語が語られるような曲調にただただ魅了された。一音ずつ音を合わせて弾いてみるだけで、胸が躍った。約五ヶ月後の発表会でこの曲を完璧に演奏し、観客にも感動を与えたい。そう決意して練習をはじめた。

受験勉強の合間や高校入学後の四月、基本的な指の動きや手首の使い方を毎日繰り返し練習し、徐々に一曲通して弾けるようになった。しかし、五月六月と高校生活が本格的に始動すると、ピアノに向き合う時間が減っていった。それもそのはず、私は毎日片道一時間かけて通学する上に部活動だけでなく生徒

会活動にも励んでいたのだ。昔から好奇心旺盛な私にとって、どれもやりがいがあり楽しかった。しかし、毎日が飛ぶように過ぎていってしまう。常に時間に追われ、思うようにピアノの練習ができないまま、時が過ぎていった。

七月になった。気付けば発表会まで一ヶ月を切っているのに、バラードは四月から全然上達していない。特に私が苦手としていたのは、終盤のコーダ部分だった。左右各手で三音、四音を押さえなくてはならない上に、テンポも速い。うまく弾こうとすればするほど無駄な力が入ってしまい、腕がすりそうになる。練習していかないわけではなかったが、練習不足であるのは明らかだった。このままでは格好良く弾けない。観客にバラードの良さが伝えられない。「好きでやっていること、つらいはずはない」そう自分に言い聞かせながらも、楽しみだったレッスンまでもが億劫になっていった。

ピアノは演奏者の心に素直だ。しとしとと雨が降るレッスンの日、先生は私の演奏をとめ、

「音が硬すぎる。何か恐れているものがあるんじゃない。」と尋ねた。先生は、普段とは違う鋭い目をしている。ドキッとして、うまく言葉が出てこない。恐れているものなんてないはずだった。けれど、本当は気付いていた。自分には勉強と部活動、生徒会、ピアノ、すべてをこなす力が無い。そして、それを認めたくなくてずっと気付かないふりをしていた。先生は教えてくれた。

「頑張るといふ言葉には、『我を張る』という意味もある。」のだと。頑張ればやれると信じていたけれど、今の私はただ強がっているだけだ。この心が体を硬くし、音まで硬くしてしまっていた。悔しくて情けない気持ちになった。このままではいけないのかもしれない。でもどうすればいいのか。どれもやめたくない。先生に胸の内を話すと

「今はそうやって悩む時だよ。強がらずにありのままの音で表現すればいい。」  
そう穏やかに言ってくれた。

いつか私も何かを手放す時が来るだろう。自分の道を定め、その方向へ力強く進んでいく人でありたい。大人たちは、いつ何を手放してきたのだろう。私は今何かを手放すべきなのだろうか。でも、単に手放すのは「諦め」のような気がする。先生の言葉のとおり、強がらず、うまくいかない自分を認めながら前に進む、今はそれでいいのかもしれない。勉強も部活動も生徒会もピアノも、うまくいなくても精一杯取り組もう。ただがむしやりに毎日を過ごしていた私は、一度立ち止まって自分を見つめ直すことができた。

いよいよ発表会当日。ようやく梅雨が明け、外はぎらぎらとした強い日差しが照っている。短調のメロディーと長調のメロディーが次々と入れかわり、テンポも遅くなったり速くなったり一定でない、おまけに音の増減も激しいバラード。迷いながら進む今の私みたいだ。五ヶ月前に目指した完璧な演奏とは程

遠いけれど、高校一年生、十六歳の今の私の音でバラードを表現しよう。舞台上の照明を感じながら深呼吸する。そして、少しでも軽くなった心で、私は鍵盤に手を広げる。

## (三原 由麻先生指導)

(審査員評)ピアノ発表会に向けて選んだ一曲のバラード。筆者が葛藤しながら自分自身を見つめ、「十六歳の今の私の音」を受けられるまでの心の動きが丁寧に描かれている。高校生としてすべてをこなす力が無いことを自覚する恐れは、多くの共感を呼ぶであろう。静かな筆致であるが、中盤の「我を張る」自己に気づき、「手放す」ことは「諦め」なのかとたまたみかけるように自問自答する様は読み手の心を揺さぶる。書き出しが巧みで表現力が高く、天候の変化による場面転換や会話文、結びの一文も効果的で読み手を引き込む作品である。今後、筆者の奏する音が自身の成長に伴いどのように変化していくのが楽しみである。